

〈孤独の向こうに〉

ジャーナリスト  
松本 侑壬子

トルコのカッパドキアは長らく行ってみたい憧れの土地だった。そびえ立つ奇岩の中の洞窟に、かつて隠れ住んだ修道僧が独特の壁画を残している。地下深く複雑に入り組む通路は、戦時には敵を欺く迷宮となった。天をも突き刺さるばかりの岩山の連なる渓谷の上には、現代の観光客のために無数の気球が浮かび、この奇怪な大自然の眺めを天空から満喫できるようになっている。ここは世界中からの観光客を引き付ける世界遺産でもあるのだ。

この映画の舞台は、この地に建つ、ある老舗ホテル。急な坂道の上の岩山をまるごと彫り込んだような形のユニークな岩のホテルだ。荒々しい自然の只中で、濃密に展開するこのホテル兼住居のオーナー一家の愛の葛藤の行方を描く。

ホテルの名は「オセロ」。オーナーのアイドゥンはかつてはイスタンブールで舞台俳優兼ジャーナリストとして活

躍していたが、資産家の父の死で引退し、若く美しい妻ニハルと自分の妹ネジラとともにここに戻って来た。他にも貸家などの不動産をもち、人もうらやむ裕福な生活を送る。

ある日、走っているアイドゥンの車に道端から石を投げつけた少年がいた。捕まえてみると悪びれもせず、憎しみに燃える目でアイドゥンをにらみつける。家に送ってゆくと、そこはアイドゥンの貸家で、家賃が払えず数日前に家財道具が差し押さえられたばかりだった。少年の父親で飲んだくれの乱暴者イスマイルは不遜な態度で嫌味たっぷりに恨み言をぶつけるが、その弟のイスラム聖職者ハムデイは懸命にとりなす。岩山の上と麓<sup>ふもと</sup>では人間同士の調和も難しい。

アイドゥンは地元紙にコラムをもち、ゆくゆくはトルコ演劇史を本にまとめようと研究を続けている。が、離婚して戻ってきた妹ネジラは兄を「吐き気がす

るほど感傷的だ」とこき下ろし、厳しい議論を吹きかける。自分はこれまで我慢を重ねてきたのだから、不満をぶちまけてもいいのだとして、若いニハルにも心無い言葉を浴びせかける。家族はそれぞれに孤独で、互いに優しい言葉を交わすことがない。

やがて季節は冬になり、和やかだった日本人を含む宿泊客らが旅立って行った。妻のニハルは夫の裕福な資産を当てに慈善活動を生き甲斐にし、家に見知らぬ大勢の男女を招いて勝手にパーティーやら会合やらを開く。夫には頑なに手出しをさせない。たまりかねて詰め寄る夫に、互いに自分の道を行くべきよ、と言いつつ。話せば話すほどに二人の心は行き違い、溝は深まってゆく。

妻を残してイスタンブールへ向かう決心をするアイドゥンは、多額の資金を妻に渡し家を出る。ようやく自由になったかに見えたニハルは、大金をもって訪れた少年の家で思いがけない形で自分の慈善の正体を思い知らされる。降りしきる雪は行く手を阻み、山全体が一家を抱き込んでしまうかに見える。戻って来たアイドゥンが、初めて妻に語りかける言葉は…。雪の向こうにほのかに灯りが見える。



わだち  
『雪の轍』

トルコ仏独合作映画 (196分)

監督：ヌリ・ビルゲ・ジェイラン

出演：ハルク・ビルギネル、メリサ・ソゼン、デメット・アクバア、ネジャット・イシレル、アイベルク・ペクジャン、セルハット・クルッチほか

公開中

© 2014 Zeyno Film Memento Films Production Bredok Film Production Arte France Cinema NBC Film